

# ベトナム人に関わる 医療と文化の違い

2008年11月

ベトナム語翻訳・通訳者  
MIC かながわベトナム語医療通訳スタッフ

グエン テイ ミン タオ

## 1 在日ベトナム人を取り巻く現状と背景

国際化が進んで、日本の外国人登録者の数が急増したために、外国人患者のニーズにも大きな変化が起きています。現在、日本には200万人を超える外国人登録者（2007年末）があり、人口比は全体の1.69%になっています。

在日のベトナム人は、難民（インドシナ難民）、留学生、民間企業の駐在員の順に多く、都道府県別では神奈川県に最も多く住んでいます。同県内の外国人登録者数を見るとベトナム人は7番目で、合計5,202人となっています。市町村別では、横浜市が最多で1,613人、次に厚木市が570人、川崎市が512となっています。

日本語が不自由なベトナム人患者が医療機関に行き詰るケースが発生しており、その主な現状は下記のとおりです。

### 家族や知人・友人の通訳

高齢化したベトナム人のために母語による支援が必要となっています。ODP（合法出国計画：UNHCRとベトナム政府との覚書により、海外の家族との再会等を目的とする場合は同国から合法的に出国できるもの。）により、難民の親族が母国から移住してきますが、そのなかには高齢者が少なくありません。また、難民1世も高齢化してきています。

そうした人たちは病院に行きたくても、文化の違いや言葉（難しい専門用語）が大きな壁になっています。1.5世（子どもの頃に親と一緒に渡日）や2世は日本語がよくできますが、1世の親のために仕事を休んで付き添ってはあげられません。たとえ、がんばって病院に一緒に行ったとしても、母国語、特に大人が使用する専門用語などの知識が不十分な場合もあり、医師と親との正確なコミュニケーションがとれないことも珍しくないようです。

自分より日本語ができる人に報酬や交通費を払って病院へ同行を依頼することもあります。医療知識がない人だと誤訳により正しい治療が行われないケースもたびたびあります。たとえば、避妊リングの装着を頼んだのに避妊手術の依頼と誤訳され、取り返しのつかないことになった例や、慢性中耳炎の患者に医師は「炎症している耳はそんなよく掃除しなくても良い」と言ったのに「よく掃除して」と訳し、聴力回復手術を受けなくてはならなくなったこともありました。

### 国際結婚のベトナム人妻の精神的ストレス

国際結婚で日本人やベトナム系日本人の配偶者等が増えています。妊娠・出産の際には病院に行くことが多くなりますが、国際結婚のカップルは、夫が仕事を休めないために一緒に病院に付いてきてくれることはありません。また、育児や異国での生活は精神的な負担にもなるために、精神科にかかる人もいます。難民ではないために難民の一部の人からいじめられたり、役場の相談窓口に行っても言葉が通じないので、ますます精神的に追い込まれたりする人もいます。

### ベトナム人への冷遇

言葉が分からないという理由で診察を断られたり、診てくれても本当に自分の病状を理解してくれたのか不安のままであったり、よく分からないまま薬を飲んだりするのはよくある話です。日本人と同じ治療費を払うのに言葉の壁により、差別され、嫌味を言われ、人権問題ではないかと言えるくらい悪い対応されたこともありました。

### 内戦のトラウマ

兄弟の骨肉争いような内戦により、同じベトナム人ならどんな家族にも色々な形で辛い体験や犠牲があるはずで、ときどき病院で、ベトナム出身の患者に気を遣って、わざわざベトナムの内戦等を話題にする医師がいますが、辛い体験は思い出したくないのが心情です。むしろ、その患者のお子さんの成長やベトナムの風習や食文化を聞いてあげた方が、実はお互いのためになるようです。

## 2 ベトナムの食文化

ベトナムは国の形がS字型でインドシナ半島東部を細長く占め、南シナ海に面し、うしろに山脈を有する国なので、自然の恩恵から海の幸も山の幸も両方たくさん採れます。長年、中国の支配を受けた後、1887年からフランス保護領となったため、食文化には中国とフランスから強い影響を受け、それぞれの味の長所をうまく取り入れ、ベトナムにしかない独特なおいしさをつくり出しています。

ベトナムでは、親戚や知り合いだけでなく、通りかかった人にも挨拶をした後必ず「何か食べましたか？」と聞きます。中国やミャンマーなどでも「ごはん食べましたか？」という挨拶（本当の意味で聞いているのではなく単なる挨拶）がありますが、それは、おそらく過酷な生活環境の中で「食」の重要さとありがたさが身にしみているからではないかと思えます。

ベトナム食文化は民族の豊かな心を育みます。日々の食卓は家族の団らん場であり、家族一人一人にとって人生の楽しみの一つであり、家庭の味の大切さを感じさせる場でもあるでしょう。

ベトナム料理はタイ料理ほど辛くないし、中華料理のように油を多く使わないので、日本人の口にはとても合います。上手に野菜やハーブをアレンジし、それは美容と健康によく、見た目も楽しめます。一口食べれば「ベトナム料理の美味しさで心の感動が倍増」と言っても過言ではないでしょう。

ベトナム人は野菜をよく食べるイメージですが、それは、実は魚や肉に合わせる薬味のようなものと言った方が正しいと思われます。毎日、家族の健康に気遣い、いろいろな香草や薬味、野菜と旬の食材を生かして料理するのはお母さんたちの重要な仕事です。子どもはこうして結婚するまで、毎日、家庭の味を自然に覚えて行きます。たとえば、赤い小ネギ、シソや生姜は魚の臭みを消してくれるだけではなく風邪によいといいます。下痢や食中毒にはニッキや生茶葉や生姜が効きます。お産の後、生秋ウコンは川魚と煮付けたら胃腸機能を活性化させ、低カロリーでタンパク質が豊富な川魚を消化しやすくし、栄養満点で身体回復に安くて最適な食べ

物です。

ベトナムの病院の食事についてですが、日本ようにあまりよく献立されず、メニューが単調でおいしくありません。美食の患者さんは食べらず、毎日、家の人にお弁当を作って差し入れてもらうのか、病院門の近くにある民間の店で食事するかになってしまいます。

### 3 ベトナムの医療事情

新聞などで、ベトナム国内の医療は遅れているという偏見で記事が書かれることがあります。確かに地方（田舎）の方はまだまだですが、都市の大きな病院は先進国の医療に近いレベルになったようです。主な理由は、

現地の外資系企業の駐在員向けに作った国際病院が増え、一部の富裕層だけですが、治療費を工面できればベトナム人でも行くことができ、優れた医師と最先端の治療を受けるチャンスとなっています。

文化交流や人材育成などの外交支援により最新医療設備が備わり、フランスやアメリカ、ドイツ等の奨学金で専門研究、留学の機会が毎年多く与えられています。元々勉強熱心なベトナムの国民性に、海外研究の手続きも解放的で、個人病院の宣伝を兼ねて、毎年必ずアメリカやフランスの勉強会へ出かける先生らが多いようです。

また、NGOの国境なき医師団は、無償で難しい手術に協力し、ベトナムの優秀な外科医を生み出すのに貢献したと高く評価されています。日本の支援については、世界の人々を感動させ、深い記憶に残ったあのビエット君とドック君の手術が、いまだに日越友好関係の証とされています。

ベトナム国内では近年、外資系ベビー用品企業のスポンサーで欧米専門医の著の家庭医学本が頻繁にベトナム専門医によって翻訳され、とても人気です。なぜかと言うと日本と違って、処方せんがなくても、自分の病状を説明すれば、薬局で簡単に薬が手に入るからです。自分の健康を守るための手段の一つですが、日本の常識では想像できないでしょう。

しかしながら、薬局や個人診療所では自分のところの薬の方がよく効くと思わせるように、いつも強い薬を出すところも多いといえます。必要より、3、4倍量が多く、ビタミン剤を一緒に売り付けたりします。だんだん、同じ病状でも強い薬しか効かないようになり、さらに強い薬が必要になるという悪循環で、とても危険でもあります。

結核は、昔の考えでは効く薬が無く死に至る病気でしたが、現在は治せるという認識が定着しております。大きな病院ではきちんと薬が処方され、専門医が常駐している肺結核治療センターや個別病棟が設けられています。完治させるために地方からこれらの病院に結核の患者を搬送するケースが多くあります。

鳥インフルエンザであれば、もちろん恐ろしい病気で大騒ぎしますが、風邪や普通のインフルエンザ（いわゆる季節のインフルエンザ）程度では、昔からあまり薬を飲まず、検疫力を高めるように、色々な薬味粥を食べ、体力をつけて、ハーブの家庭サウナで汗をながし、自力で

治すようです。日本の病院ではインフルエンザで隔離されることがありますが、ベトナム人にとってはかなり驚きのようです。

#### 4 ベトナムの出産文化

ベトナム国ではお産予約の制度があまりありません。母子手帳もなじみのないもので、普段は一般的な診断記録手帳（医師の診断内容と処方される薬等を記録する「S ố Y b ả」）と同じようなものを多く使っています。

特に問題が無ければ、お産するまで定期健診もせず、病院に行かない人もよくいます。遠い地方の田舎だと、病院に行くお金が無く、産婆の世話になります。お産した後、日本の法律のように出生届の期限がはっきり決められていません。昔は地区によっては、子どもが小学校に入る直前に出生の手続を行う親も珍しくありませんでした。農業が忙しく、後になって出生届を出す時に子どもの生年月日が「自己申告」になるということは、冗談抜きでよくある話です。

公立病院は、低収入の人には助かっていますが、治療費が安くても待ち時間が長く、主治医の先生だけではなく看護師の対応まで悪いため、治療費が2 - 3倍高くても、その公立病院の医者が勤務時間外に開いている個人診療所に通うのが主流です。臨月になったら公立病院で入院できますし、VIP 待遇も受けられそうです。最新設備が置かれていて、お金さえ払えば超音波で赤ちゃんの成長の様子を好きな時にいつでも見られます。最近は、超音波で赤ちゃんの性別を見るのが人気で、そうした親の気持ちを利用して利益に走る医師もあり、あまりに超音波を使い過ぎではないかと心配する専門家の声がしばしば新聞誌上に登場します。

儒教思想の影響で昔から跡取りの男の子を産めないと親不孝だと批判されてきましたが、その古い考え方は未だに根強く残っています。いくら子どもを産んでも、男の子ができなければ「子どもが産めない女性」だと見なされ、特に夫が長男だと、外に愛人を作って隠し子ができても仕方がなく、がまんするしかないようでした。ベトナムでは人口を調整するため、1世帯に二人までしか子どもを作らないようにする制度があります。国营企業の従業員なら三人目を産むにはクビになる覚悟が必要でしょう。飲み会でも女の子ばかりを持つ父親は顔が上げられないくらい辛いそうです。初子が男であれば、当然、奥さんの立場も強く家庭の決定権を握れるようになるといいます。

医療がまだ発展していなかった昔は、母子死亡のケースが多く、ベトナムの女性にとっては、お産は一人で海を渡るくらいに命を関わる大変な試練だと言われました。それに備えるために妊娠してからできるだけ、たくさん食べて、太った方がよいとされました。母体が太れば赤ちゃんもきっと元気で大きく育っていると、今でも信じられています。ですから臨月に20kg以上太ったという妊婦も珍しくないようです。

日本のように減塩の食生活に切りかえたり、甘い物を控えたりするのはおかしく聞こえます。希望する日（吉日やご先祖様の誕生日など）に産みたいがために帝王切開を選択するという勘

違いをしている人や、陣痛を避けるため、麻酔をかけて帝王切開を希望する妊婦が年々増えており、流行しているようです。

お産の後、早く母体を回復するには、基本的に3か月10日間はじっと外出せず、風の当たらない所で安静にし、冷たい水も使ってはいけないといえます。母乳がたくさんできるように、とにかく大量に栄養のある物を食べるようにします。定番メニューは豚足を使った根野菜スープや鳥肉また牛肉とウコンの塩辛煮や川魚煮付です。元の体型に戻ったことがあまり喜ばれず、逆になぜそんなに貧弱なのかと言われる。食べさせていないと思われて夫やお姑の恥になるということでしょう。嫁が思う存分、わがままを言って食べられるチャンスであるとも言われます。

オムツを含む新生児の着物はお母さんの古着を使うか、または健やかに育った近所のお子さんからもらった方が縁起が良いと信じられています。地方（農村）の習慣は、初子なら臨月の3か月前に里帰りし、お産婆さんや奥さんの母親に面倒を見てもらうのですが、都会へ出稼ぎにきた若い夫婦は里帰りするにも交通費が非常に高く、ご主人が仕事を休めないこともあって、公立病院で生みたいと希望するそうです。

しかし現状では大きな公立病院の分娩室は混雑し、結局は地区の保健所で産むようにさせることが多いようです。そこは衛生的に様々な問題があり、母子の健康にも悪い影響が出るケースも発生します。

WHOの支援等により、生まれてから小学校に入るまで国際基準で予防接種を受けられますが、お母さんの身体ケアはまだ十分ではありません。二人目の子供を産んだ後に避妊する人も多く、その場合は検査を受けずに市販のピルを買って飲むというケースがよくあります。個人差により副作用等の心配もありますが、その説明は、医者からではなく購入する薬局の薬剤師からもらえば大丈夫だと考えています。

## 5 文化の違い

政治や宗教的な価値観は別にして、一般のベトナム人の価値観は日本人に近いとよく言われます。相手を傷付けないように遠回しな物言いをし、どんな嫌なことをされても顔に出さないというのにも近いと思います。約束したら絶対に守らなければ、信頼できない者と見なされます。“忠”“礼”“孝”は、代々、人間を育てる基本文化であり伝統です。自分を下げて相手を持ち上げ、まわりに対して謙虚な姿勢を取ることは美德だと思われれます。ベトナム人は人情深く、年長者を敬い、弱者を助ける精神があります。ときどき人を助けてはめられるという裏目に出ることがありますが、それでも言い返さず、それは自分自身のせいではなく、“良心”に恥じなければそれで好いと考えるのです。

昔から教育が重視され、医者や教師は相当の努力と道徳が必要であり、誰でもなれるものではなく、社会的に最も尊敬される職業でもあります。医師から「薬を飲まなくて良い」と言わ

れても、せっかく病院に来て医師に診てもらったのだから「何でも良いから一応、尊敬する先生の薬をもらった方が安心」と考え、薬の処方をねばる人もいます。

家族を大事にするベトナム人は長年、海外生活を送ってもそうした文化・習慣は消えず、“家族的な”風土が会社組織や医療現場でもよく反映されています。

## << コラム >>

### 「海外のベトナム系医療事情」

1975年以降、海外で生活しているベトナム人は増えて、その生活に合わせ、ベトナム人学校等やベトナム系の医療も発展しています。日本ではあまりベトナム系医者や診療所やクリニックを見かけませんが、カナダやアメリカでは当り前のようによく見かけます。ベトナム系患者がベトナム系医師がいる病院に行くのも、一つの安心感からです。母国語だけでなく、英語で気楽に相談できるホームドクターが信頼され、家族の2 - 3世代と一緒に通院したり、家庭医療のママ知識を教えるもたったりしています。治療法は現在の薬以外に東洋治療方（針治療 = Acupuncture, 漢方薬 = Chinese Herbal, ハーブ治療 = Herbal Medicine, Naturopathic Medicine, 指圧治療 = Reflexology etc ...）が人気を呼んでいます。その国々で発行する Vietnamese Newspaper 等は数多くあり、その表紙には全部ベトナム系医療機関の広告を載っていたことがよくあり、驚きました。

### 「在米ベトナム人の母国貢献活動」

在アメリカや在カナダ等のベトナム系の成功者は、残酷な内戦による辛い経験と民族の犠牲を忘れず、優しく深い理解と広い心を持って、様々な形で母国に貢献しています。アメリカやカナダ等の国内では愛国精神と母国アイデンティティを持ち、自分の同胞と助け合って、住みやすい生活を営んでいます。彼らはまた自らベトナムに足を運んで子どもの奨学基金と学校を作り、将来有望な人を育てています。

Le Duy Loan さんは、1962年にベトナムで生まれ、幼少時代は当時の子どもたちと同じく暮らしは決して楽ではありませんでした。1968年には内戦で自宅等を全部壊され、住み移った都市では毎日、早朝5時から起き、父親の事業を手伝い、午後2時になったら学校を通う日々でした。アメリカに移住した時にも、英語の単語を一文字もできなかったといいます。その彼女は現在、有名な成功者で、本業の業績を伸ばしながら友人と非利益 Sunflower Mission という団体を設立し、運営しています。「アメリカだけではなく、どこの国でも胸を張って自分がベトナム人だと言える人になりなさい」との父親から教えるお陰で現在の彼女があるといいます。母国であるベトナムを愛し、このような活動にがんばれる原動力にもなった訳です。

もう一人のベトナム人の誇りであり、成功者は Dung Trung さんです。彼は1967年にベトナムで生まれました。1985年にアメリカに移住したときは、お世辞にも上手と言い得

ない程、英語ができず、彼は学校の授業を理解するだけでも涙が出るくらいの苦勞だったといえます。言葉の壁と文化の違いは辛かったわけですが、フルタイムで一所懸命働きながら自力で大学を卒業し、現在は海外で生活しているベトナム人向けの「Viet Net Forum」、ベトナム向け投資会社「V-Home Group」などを運営しながら Viet Heritage Society、Vietnamese American Silicon Valley Net-Works の役員としてがんばっています。その実績が評価され、2005年からGeorge W. Bush大統領により、越米の間に工業、科学及び文化、教育等の情報交換、交流（連携）活動を中心に設立されたアメリカ政府の Vietnam Education Foundation（VEF）の役員を任命されました。

[ 著者 ]

グエン テイ ミン タオ (Nguyen Thi Minh Thao)

ベトナム語翻訳・通訳者、M I C かながわベトナム語医療通訳スタッフ、第5期&第6期外国籍県民かながわ会議委員

ベトナム出身。大学卒業後は、日系企業の役員秘書兼通訳の経験を得て、テレビ局の取材VTR翻訳等と企業の商談、視察等の通訳、ビジネス書類の翻訳、研修管理等や海外赴任前研修の講師等をしながら在日ベトナム人たちのために法律相談や医療通訳等のボランティア活動を行っている。

西村 明夫

NPO法人多言語社会リソースかながわ プログラム・アドバイザー  
多文化医療サービス研究会共同代表